

対人不安に影響を及ぼす認知的要因についての研究

河野 芳裕* 中西 大輔**

Effects of cognitive factors on social anxiousness among undergraduate students

Yoshihiro Kouno and Daisuke Nakanishi

This study examined the relationship between cognitive factors and social anxiousness. Preliminary survey was administrated to 104 undergraduates to construct the responsibility scale. Twelve items were selected on the basis of item-total correlation analyses, and reliability and validity of the scale were examined. The main survey was conducted to 159 undergraduates using the responsibility scale to find out the correlation between social anxiousness and cognitive variables such as public self-consciousness, social self-efficacy and responsibility. The results show that social anxiousness score was positively correlated with public self-consciousness score, negatively correlated with social self-efficacy score, and partly negatively correlated with responsibility score. Moreover, significant interaction between social self-efficacy and responsibility was found for social anxiousness score. However, contrary to the prediction, the results did not show the positive correlation between responsibility and social anxiousness. Keywords; social anxiousness, public self-consciousness, social self-efficacy, responsibility

問題

対人不安とは、“現実、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態”と定義されている (Leary, 1983)。このような対人場面における不安は、不安が生起する状況の違いによって、デート不安、スピーチ不安、シャイネス、対面不安、あがりなどに分類されてきた (Leary, 1983)。本研究においては、これらの対人場面における不安を状況や程度などを幅広く統合的に捉えた一般的な概念として、対人不安という用語を用いた。また、対人不安の個人差特性を示す語としては、対人不安性や対人不安傾向な

*広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

**広島修道大学人文学部 (Faculty of Humanities and Human Sciences, Hiroshima Shudo University)

どがあるが、本研究では、対人不安意識を用いた。

対人不安の程度は、個人がその場面をどのようにとらえたかという認知の違いによって異なるため、どのような個人の認知が対人不安へ影響するのかを理解することは、対処法や治療を考えていく上で重要な役割を果たす。対人不安の認知理論の土台として重要な枠組みを提供したのが、Schlenker & Leary (1982) による自己呈示モデルである。このアプローチによると、人々は以下の2つの条件がそろったときに対人不安を経験することになる。第一は、他人に特定の印象を与えたいと動機づけられていることであり、第二は、そのような特定の印象を与えることができないと感じることである。自己呈示モデルでは対人不安の強さをこの2つの変数の積の関数と捉えている。Leary (1983) は、前者を自己呈示欲求、後者を自己呈示効率と呼び、これらに関連する状況的、特性的な要因をあげている。このモデルは、対人不安を感じるすべての事例について十分に説明可能なモデルであり、対人不安研究に対する理論的バックグラウンドを提供し、その後の多くの研究や考察を生み出す契機となった(菅原, 2002)。また、臨床場面においても、対人不安の発症を予測し、予防や治療の手がかりを得る上で有効とされている(丹野, 2001)。本研究では、この自己呈示モデルの枠組みに従い、公的自己意識、対人的自己効力感、責任意識の3つの認知特性と対人不安意識との関連を検討する。

公的自己意識と対人不安

公的自己意識とは、自己意識のうち、自己の外的側面への関心の高さである。これが高い人は、他者から受ける自分の評価に対して非常に敏感であるため、他者に与える自分の印象を操作し、他者からより肯定的な反応を得ようとする。つまり、公的自己意識が高い人は自己呈示欲求も高くなるといわれている(Leary, 1983)。この公的自己意識の高さと対人不安との関係に関しては、これまでいくつかの研究がなされている(e.g., 菅原, 1984)。これらの研究結果から、公的自己意識と対人不安の間には正の相関関係があり、高い公的自己意識は、対人不安を引き起こすための必要条件であることが明らかになっている。しかし、公的自己意識が高いからといって必ずしも対人不安を感じるとは限らない。その根拠として菅原(1984)は、公的自己意識と自己顕示性との間にも強い正の相関がみられたことを報告している。つまり、他者の目に映る自分を意識しやすいということは、積極的な自己呈示的行動か、逆に防衛的、逃避的行動をとりやすいことを示唆している。以上の議論より、公的自己意識は、対人不安を規定するための必要条件ではあるが十分条件ではないといえる。

対人的自己効力感と対人不安

Leary (1983) では、自己呈示効率が低下する要因として、否定的自己評価をあげている。その中でも特に、社会的スキルのような自己の対人行動に関する評価が低い人は、自分の望む印象を他者に与えることに自信が持てず、対人不安を感じやすい。ここで重要なのが、実際に社会的スキルが不足しているかどうかでなく、社会的スキルが不足していると認知していることが問題であるという点である。原田・島田(2002)は、大学生を対象に、自分の社会的スキルが低いと評価している人ほど対人不安を感じやすいということを明らかにした。

また、松尾・新井(1998)は、社会的な有能さへの自己評価に関して、対人的自己効力感という

語を使用し、小学校高学年を対象として対人不安意識との関係を検討した。そこでは、対人的自己効力感と、対人不安意識との間に負の相関が示され、公的自己意識が高く、対人的自己効力感が低い群が最も対人不安を感じやすいという結果が得られている。同じように亀田（2001）は、大学生を対象として、公的自己意識が高く、一般性自己効力感が低いほど対人不安意識が高いことを示した。本研究では、松尾・新井（1998）に従い、対人的自己効力感を“対人場面において適切な社会的行動を遂行することが、どの程度自分に可能かについての主観的な評価”と定義して用いた。

責任意識と対人不安

自己呈示モデルでは否定的自己評価の他に自己呈示効率が低下する要因として、自己評価の基準の高さをあげている。本研究では、この自己評価の基準の高さを示すより具体的な変数として、責任の感じやすさの程度を扱う。個人の責任感が対人不安と直接に関連することを示す研究はこれまでにほとんどない。しかし、これを示唆する研究として金本・横沢・金本（2002）の、スポーツ場面におけるあがりの原因帰属に関する研究がある。この研究において、あがりを引き起こす原因として、“責任を感じた”、“他の人に期待されていると思った”というような責任感の因子が抽出され、この因子があがりの原因としてもっとも強い影響を与えていることが示された。スポーツ場面だけでなく、対人場面においてもあがりは重要であり、あがり是对人不安の中に含まれる概念である。このことから、対人場面においても、責任を強く感じれば他者の期待や自分の役割を過大視し、その結果不安を感じてしまうのではないかと考えることができる。

しかし、丸山・清水（1990）は、社会不安と社会的責任感との間に負の相関があることを示した。この結果は、これまでの議論と全く反対の結果を示しているが、丸山・清水（1990）の調査では、社会的責任感の高さとその責任を果たせる能力とが相関していた可能性がある。つまり、たとえ自分に責任を感じやすいとしても、対人場面にうまく適応できる自信がある場合は、対人不安を感じにくいと、そのような対人行動をとることができなと感じたとき、対人不安を感じるのではないかと考えられる。このように、対人的自己効力感の程度の違いによって、責任感の高さが対人不安を引き起こしたり、または抑制したりする可能性がある。しかし、このような責任感の影響を示した研究はこれまでにない。また、これまでに作成された責任感を測定する尺度において、責任の感じやすさといった意識の部分と、その責任を果たす行動や能力の部分とを区別したものはみられない。本研究では、責任意識をその責任を果たす能力とは独立に、“なすべき任務や役割を重視し、それを果たそうとする意識”と定義した。

予備調査

目的

予備調査は、本調査で用いる個人の責任意識の高さを測定する責任意識尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行うことを目的としている。

方法

調査対象者 A大学の学生104名（男子63名、女子39名、不明2名）。平均年齢は20.14歳、標

準偏差は3.14であった。

調査期間 2006年8月から10月にかけて個別に配布し、実施した。

質問紙の構成 以下の3つの尺度を使用した。援助規範意識尺度と義務目標尺度は責任意識尺度の妥当性検討のために使用した。

1. 責任意識を測定する尺度

個人の責任意識の高さを測定する尺度を、Harris (1957) の児童用社会的責任感尺度の50項目を参考に作成した。項目の選択・修正・追加を以下のような手続きに従って行った。

- (a) 本研究では責任感を実際の行動や個人の能力と独立に扱うため、行動を伴う責任感の強さを示す項目（“クラスでリーダーに選ばれたことがある”など）を除外した。
- (b) 本研究は大学生を調査対象とするため、大学生には適さないとと思われる項目を除外した。
- (c) Harris (1957) の尺度は50年近くも前に作成された尺度であるため、現在の時代背景に合致しないと思われる項目を除外した。また、国や政治など、日常生活と関連が薄いとされる事象に関する責任感についての項目を除外した。
- (d) 一部の項目に関して意識の部分を強調し、“～すべきだ”というように語尾を修正した。
- (e) 内容が近似している項目を統一した。
- (f) 実際の大学生が日常生活の中で感じている責任意識についての内容を取り入れるため、本研究で新たに4項目を追加した。

これらの作業により、選択・修正された14項目と新たに追加した4項目の計18項目の尺度を作成した。調査対象者には“5. そう思う”から“1. そう思わない”までの5件法で回答を求めた。

2. 援助規範意識尺度

責任意識尺度の妥当性を検討するために、箱井・高木 (1987) によって作成された他者を援助することに關する規範意識の個人差を測定する援助規範意識尺度を使用した。尺度は29項目からなり、“5. 非常に賛成する”から“1. 非常に反対する”までの5件法で回答を求めた。

3. 義務目標尺度

小平 (2001) の自己目標志向性尺度の下位尺度で、自己のあるべき姿を重視し、目標を比較的近い未来に設定し、常に自分の想定する水準を満たしておこうとする傾向を測定するものである。尺度は8項目からなり、“5. あてはまる”から“1. あてはまらない”の5件法で回答を求めた。

結果と考察

項目の採択 責任意識尺度の内的一貫性を高めるために、各項目得点と、その項目を除いた場合の全体得点との相関 (I-T 相関) を算出し、相関係数が0.30未満であった6項目を削除した。そして、残った12項目に関して再びI-T相関を算出したところ、すべての項目において0.30以上の高い相関係数を示した (Table 1)。よってこの最終的に残った12項目を責任意識尺度とした。なお、責任意識尺度得点の性差に関しては有意な差が得られなかったため ($t(95.8)=1.18, n.s.$)、以降の分析は男女を区別せず行った。

信頼性の検討 次に、この12項目の尺度について因子分析を行ったところ、因子間の固有値の差が、第1因子と第2因子の間に2.14、それ以外の因子間ではどれも0.20以下と、第1因子と第2

因子の間のみ落差が大きかった。よって本研究で作成した責任意識尺度は、自分の任務や役割を果

Table 1 責任意識尺度の分析結果

	平均値	標準偏差	因子負荷量	I-T 相関
1)やり始めたことを最後までやり遂げることは、いつでも重要である。	3.98	1.13	.48	.44
4)誰かに見張られていなくても、やらなければならないことはするべきだ。*	4.18	1.00	.39	.36
5)いつでも親切に接することはできないので、時には友達を裏切ることがあってもしょうがないことだ。	3.47	1.05	.41	.35
7)自分のためより、他の人々のためになることをする方が重要である。	3.21	1.10	.43	.37
10)やりたい事をする前に、やるべき事をするのは重要である。	3.98	0.99	.46	.41
11)他人に正直であることは、なによりも大切である。	3.60	1.20	.52	.45
12)仕事を任されたら、たとえ大変でもあきらめたくない。	3.91	1.03	.52	.46
13)何か友達に期待されたら、決して裏切りたくない。	4.14	0.92	.51	.44
14)試験中にカンニングすることは、誰も気づいていなければそんなに悪いことではない。*	3.54	1.24	.40	.37
15)講義へ出席することは大事なことである。	3.64	1.12	.48	.42
16)会話の場が静まったら、自分の方から話さないといけない。	3.05	1.07	.48	.39
18)困っている人を見かけたら、声をかけてあげたい。	3.86	0.97	.61	.53

*は逆転項目。

たさなければならないという全般的な意識であるにとらえ、1 因子構造とみなした。因子負荷量は、最も低い項目でも 0.4 程度と高い因子負荷量を示した。また、寄与率は 0.29 であった。各項目の平均得点、標準偏差、因子負荷量、I-T 相関を Table 1 に示した。クロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.78$ と高い値を示した。これらの分析の結果から、本研究で作成した責任意識尺度は高い内的一貫性を持つことが示された。

妥当性の検討 尺度の妥当性を検討するために、作成した責任意識尺度の得点と援助規範意識尺度および義務目標尺度得点との相関係数を算出した。その結果、責任意識と援助規範意識全体得点との相関は $r=0.70$ ($p<.001$) と非常に高い値を示した。これにより、責任を感じやすい人は、助けを必要としている人を援助しなければならないという規範意識が強いことが明らかになり、収束的妥当性が示された。次に、責任意識と義務目標との相関係数を求めたところ、 $r=0.28$ ($p<.001$) と

有意な正の相関が得られた。よって、責任意識が高い人は、あるべき自己の姿を重視しやすい傾向にあることが示された。しかし、相関が比較的弱かったことに関しては、義務目標尺度の項目が非常に抽象的な表現が多く、現実場面と照らし合わせにくかったためと考えられる。このように、関係すると思われる2つの尺度との間に正の相関があったことから、責任感尺度は妥当性が高いことが示された。

以上の予備調査の結果から、本研究で作成された責任意識尺度は、信頼性・妥当性を備えた尺度であることが示された。

本調査

目的

本研究では、公的自己意識・対人的自己効力感・責任意識という3つの認知的要因が対人不安意識に及ぼす影響の強さを検討する。本研究を実施するにあたり、以上の議論から、次の2つの仮説について検討した。

仮説 1: 対人不安意識との間に、公的自己意識は正の相関、対人的自己効力感は負の相関、責任意識は正の相関がみられる。

仮説 2: 対人的自己効力感の程度の違いによって、責任意識が対人不安意識に及ぼす影響が異なる。対人的自己効力感が低い場合には、責任意識の高さが対人不安意識を高めるが、逆に対人的自己効力感が高い場合には、責任意識の高さが対人不安意識を低下させる。

また、対人不安は、他人が気になる、集団に溶け込めない、人と目を合わせられない、人前であるなどさまざまな種類の不安から構成された概念である。このような対人不安の悩みの違いによって、公的自己意識、対人的自己効力感、責任意識の影響する程度が異なるかどうかについてもあわせて検討する。

方法

調査対象者 A大学の1年生から4年生までの大学生計159名（男子66名、女子90名、不明3名）。平均年齢は19.60歳で、標準偏差は1.34であった。

調査期間 2006年10月に、A大学の講義で集団実施した。

質問紙の構成 対人不安とそれを規定すると考えられる要因との関連を検討するための質問紙として、本調査では以下の4つの尺度を使用した。また、調査対象者の学年、学部、性別についても回答を求めた。

1. 対人不安意識を測定する尺度

本研究では、個人の対人場面での不安の程度を測定するために、堀井・小川（1996）によって作成された対人恐怖心性尺度を使用した。この尺度は、小川（1974）の対人不安質問票やその改訂版（林・小川、1981）をもとに、時代の推移による症状の変遷、表現の難解さ、項目の多さなどの問題点を考慮し、再度改訂されたものである。対人場面での悩みの内容によって、自分や他人が気になる悩み、集団に溶け込めない悩み、社会的場面で当惑する悩み、目が気になる悩み、自分を統制

できない悩み、生きていることに疲れている悩み、という6つの下位尺度から構成されており、各5項目の計30項目からなる。“7. 非常にあてはまる”から“1. 全然あてはまらない”までの7件法で回答を求めた。なお本研究では、この対人恐怖心尺度で測定された合計得点を対人不安意識得点とした。

2. 公的自己意識を測定する尺度

自分自身への注意の向けやすさの程度を測定する尺度として、Fenigstein, Scheier, & Buss (1975)を参考に菅原 (1984) が作成した自己意識尺度のうち、自己の外的側面への関心の強さである公的自己意識を測定するための11項目を使用した。回答は、“7. 非常にあてはまる”から“1. 全くあてはまらない”までの7件法で求めた。

3. 対人的自己効力感を測定する尺度

対人的自己効力感とは、社会的行動を適切に行えるかについての主観的な評価であるが、これを、どれだけ社会的スキルを持っているかの自己評価の程度と捉えた。質問紙により測定された社会的スキルは、本人の自己評価によるものであるため、対人的自己効力感に非常に近いものと考えられる。よって、本調査では、菊池 (1988) により作成された“Kikuchi's Social Skills Scale-18 (KiSS-18)”を使用した。この尺度によって測定された得点を 対人的自己効力感得点とした。この尺度は18項目からなり、“5. いつもそうである”から、“1. いつもそうではない”までの5件法で回答を求めた。

4. 責任意識尺度

本研究の予備調査によって作成し、信頼性・妥当性の検討を行った、責任意識尺度を使用した。尺度は12項目からなり、“5. そう思う”から“1. そう思わない”までの5件法で回答を求めた。

結果

各尺度の信頼性 本調査で使用した4つの尺度の信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した (Table 2)。まず、対人不安意識については、対人不安意識得点では、 $\alpha=0.95$ と非常に高い値を示した。また、下位尺度ごとにみても α 係数は高く、内的一貫性の高い尺度であるということが示された。公的自己意識では $\alpha=0.86$ 、対人的自己効力感では $\alpha=0.87$ と非常に高い値を示した。責任意識においても $\alpha=0.76$ と、予備調査と同等の高い値が得られた。これらの結果から、本調査で

Table 2 各尺度の α 係数

	α 係数
対人不安意識全体	.95
自分や他人が気になる悩み	.79
集団に溶け込めない悩み	.90
社会場面で当惑する悩み	.90
目が気になる悩み	.89
自分を統制できない悩み	.82
生きることに疲れている悩み	.80
公的自己意識	.86
対人的自己効力感	.87
責任意識	.76

使用した4つの尺度は信頼性の高い尺度であることが明らかになった。

対人不安意識と各要因との関連性 次に対人不安と公的自己意識、対人的自己効力感、責任意識との関連を検討するために、対人不安意識の得点と、それぞれの要因との相関係数を算出した。また、3つの認知的要因を独立変数、対人不安意識の得点を従属変数とした重回帰分析を行った。

まず、対人不安意識全体について分析をおこなった (Table 3)。対人不安意識全体でみると、公的自己意識との間に正の相関、対人的自己効力感との間に強い負の相関、責任意識との間に弱い負の相関がみられた。また、重回帰分析の結果、各要因の標準偏回帰係数は、いずれも有意な値が得られた。重決定係数は $R^2=0.47$ と高く、これら3つの独立変数での対人不安意識への説明力は十分強いことが明らかとなった。対人不安意識全体でみると、もっとも影響力が強いのは対人的自己効力感であり、次に公的自己意識が強く、そして責任意識という順であった。

Table 3 対人不安意識と諸要因との関連

	相関係数 (r)	偏回帰係数 (β)
公的自己意識	.43 ***	.36 ***
対人的自己効力感	-.59 ***	-.49 ***
責任意識	-.20 *	-.14 *
重決定係数 (R^2)		.47

*** $p<.001$, * $p<.05$

次に、対人不安意識の6つの下位尺度についても同様に各要因との関係を分析した (Table 4)。まず、自分や他人が気になる悩みにおいては、公的自己意識と非常に強い正の相関があり、標準偏回帰係数も非常に高い値を示した。重決定係数も 0.54 と非常に高く、これらの要因での説明力は強い

Table 4 下位尺度と諸要因との関連

	自分や他人が気になる悩み		集団に溶け込めない悩み		社会場面で当惑する悩み	
	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β
公的自己意識	.70 ***	.66 ***	.28 ***	.19 **	.30 ***	.20 **
対人的自己効力感	-.37 ***	-.23 ***	-.57 ***	-.52 ***	-.57 ***	-.53 ***
責任意識	-.02	-.04	-.17 *	-.07	-.11	-.01
重決定係数 (R^2)	.54		.36		.37	

	目が気になる悩み		自分が統制できない悩み		生きることに疲れている悩み	
	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β	<i>r</i>	β
公的自己意識	.33 ***	.31 ***	.27 ***	.22 **	.18 *	.14
対人的自己効力感	-.39 ***	-.28 ***	-.40 ***	-.33 ***	-.45 ***	-.37 ***
責任意識	-.24 **	-.22 **	-.17 *	-.12	-.27 ***	-.21 **
重決定係数 (R^2)	.26		.22		.25	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

ことが示された。集団に溶け込めない悩みと社会場面で当惑する悩みにおいては対人的自己効力感との間に非常に強い負の相関を示した。目が気になる悩みにおいてはこれまでの下位尺度では相関のなかった責任意識に負の相関が見られたが、全体的には3つの要因が同程度に影響を及ぼしていることが示された。自分が統制できない悩みにおいては3要因の影響がもっとも弱いながらもその中でも他の要因に比べ、対人的自己効力感が強い影響を及ぼしていることが示された。生きることに疲れている悩みでは、公的自己意識の影響がなくなり、対人的自己効力感と責任意識が負の影響を及ぼしていることが示された。以上の下位尺度ごとの分析から、悩みの内容によって相関の程度が異なり、3つの認知的要因の影響力が変わることが明らかになった。

対人的自己効力感と責任意識の交互作用効果 対人的自己効力感と責任意識との交互作用を検討するために、以下の分析を行った。まず、調査協力者を対人的自己効力感得点の平均値 ($M=55.73$) をもとに高群と低群に分け、さらに責任意識得点の平均値 $\pm 1/2SD$ ($M=45.64$, $SD=6.24$) の値をもとに、低群・中群・高群の3群に分割した。そして2(対人的自己効力感の高低) \times 3(責任意識の高低) の2要因分散分析を行った。従属変数は対人不安意識の合計得点と下位尺度ごとの得点であった。なお、責任意識を3群にしたのは、責任意識が対人不安に与える影響をより詳しく検討するためである。具体的には、先程の相関分析において、悩みの内容によって不安得点と責任意識との相関がみられないものもあり、そこには曲線的な関係も考えられるためである。

まず、対人不安意識の全体得点において分析の結果、対人的自己効力感の主効果 ($F(1,153)=29.70$, $p < .001$)、責任意識の主効果 ($F(2,153)=4.69$, $p < .05$) が有意であり、TukeyのHSD法による多重比較の結果、責任意識低群と高群との間に有意な差がみられた。これは、責任意識の高い人は低い人に比べ、対人不安意識得点が低いことを示している。また、対人的自己効力感と責任意識の交互作用も有意であった ($F(2,153)=3.09$, $p < .05$)。各条件の平均値を Figure 1 に示した。Figure 1 から、対人的自己効力感が低い場合には、責任意識の高低による差はあまりみられないが、対人的自

己効力感が高い場合には、責任意識が高群で不安意識得点が低下することが示された。

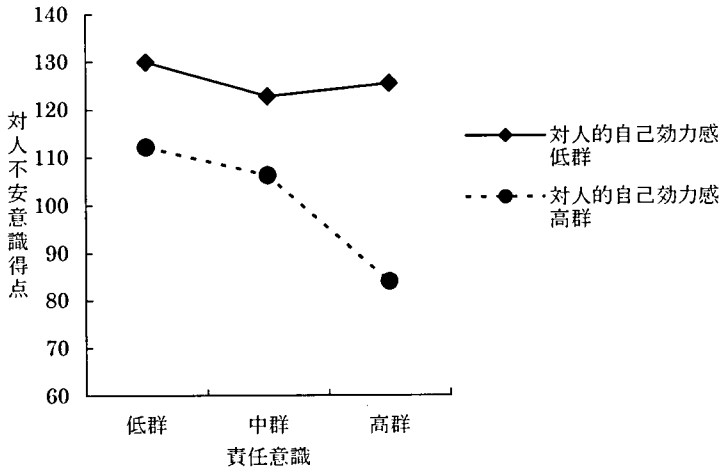


Figure 1 対人不安意識得点の条件別の平均値

続いて、対人不安意識の下位尺度ごとに同様の分析を行った。まず、自分や他人が気になる悩みについては、対人的自己効力の有意な主効果 ($F(1,152)=12.77, p<.001$) が得られ、対人的自己効力感低群の方が高群より悩みの得点が高かった。また交互作用 ($F(2,152)=3.38, p<.05$) が有意であった。各条件の平均値を Figure 2 に示した。Figure 2 から、自分や他人が気になる悩みでは、対人的自己効力感が低い場合には責任意識高群で最も不安得点が高く、対人的自己効力感が高い場合には、逆に責任意識高群で最も不安得点が高いということが明らかになった。

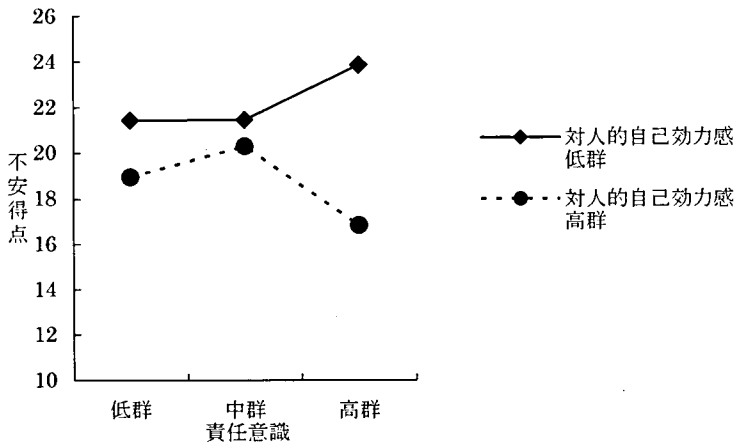


Figure 2 自分や他人が気になる悩み条件別の平均値

その他の下位尺度において、交互作用が得られたのは、生きることに疲れている悩み ($F(12,153)=4.07, p<.05$) についてのみであった、また集団に溶け込めない悩みについても有意ではないが、傾向がみられた ($F(2,152)=2.58, p<.10$)。これらにおいても全体得点同様に、対人的自己効力感が低い場合には、責任意識の高低による差はあまりみられないが、対人的自己効力感が高

い場合には、責任意識の高さが対人不安を低めるという関係がみられた。残り3つの下位尺度においては有意な交互作用は得られなかった。

なお、対人的自己効力感の主効果はどの下位尺度においても有意であり、低群の方が高群より不安得点が高かった。よって、対人的自己効力感が対人不安に与える影響は非常に強く、また、幅広いものであった。

考察

対人不安意識と認知的要因の関連性について

本調査は対人不安に影響を及ぼすと思われる認知的要因として、公的自己意識、対人的自己効力感、責任意識という3つの要因を取り上げ、対人不安意識との関連を検討することを目的としておこなった。本調査を実施するにあたり、仮説1として、対人不安意識との間に、公的自己意識は正の相関関係、対人的自己効力感を負の相関関係、責任意識は正の相関関係がみられるという予測を立てた。この仮説に関して、相関分析や重回帰分析の結果、公的自己意識・対人的自己効力感に関しては支持されたが、責任意識に関しては支持されなかった。また、対人不安の内容によってこれら3つの要因の影響の強さが異なるかどうかについて検討した結果、悩みの違いによって各要因の影響の大きさの程度も異なることが明らかとなった。

要因ごとにみた対人不安意識との関連性について

対人不安意識との関係を要因ごとに見てみると、まず、公的自己意識については、全体的にみて対人不安意識との間に強い正の相関がみられた。よって、他者からの評価や自分の外的側面を気にしやすい人は、対人場面で不安を感じやすいといえる。また、悩みの内容でいえば、自分や他人が気になる悩みとの関係が非常に強く、堀・小川(1996)の結果と一致していた。このことから、公的自己意識の高い人は対人場面において、自分が他人からどう思われているのかという評価を非常に気にし、否定的に評価を受けることへの恐れが強いと考えられる。

次に対人的自己効力感については、対人不安意識との間に強い負の相関がみられ、対人行動に対する自己評価が低い人ほど、対人不安を感じやすい傾向にあることが分かった。また、不安の内容ごとに検討したところ、対人的自己効力感はずべての下位尺度と0.1%水準で有意であり、対人的自己効力感が対人不安意識に与える影響は非常に強いと考えられる。その中でも、特に集団に溶け込めない悩みや社会場面で当惑する悩みとの負の相関が強かった。この結果から、自分の社会的スキルに自信が持てない人は、会話場面に参加することや人前で自分の意見を言うなどの社会的行動をうまくおこなうことができないのではないかと不安を持ちやすいと考えられる。

責任意識については、対人不安意識との間に弱い負の相関がみられた。これは丸山・清水(1990)と同様の傾向であり、仮説とは逆の結果であった。不安の内容ごとの分析では、目が気になる悩みとの間に負の相関関係がみられ、責任意識の低い人ほど、他人の視線に対する恐れが強いということが示された。責任意識の低い者にとって、他人が自分に視線を向けてくるということは、自分には責任がないと考えているのに、他者が自分に何かを期待していると感じ、不安を感じるのではな

いかと考えられる。また、生きることに疲れている悩みとも独立に負の相関関係がみられた。よって責任意識の低い人は、人生への疲労を感じやすいということが示された。人にとって責任を感じるということは、自分には果たすべき任務があると感じることであり、それを果たすことができれば非常に充実感を感じる。しかし責任意識の低い人は、対人場面での自分の役割を果たすことに対して関心が薄く、そのため達成感や充実感を得られず、生きていることに脱力感を抱きながら生活しているのではないかと考えられる。

対人的自己効力感と責任意識の交互作用効果について

次に対人的自己効力感、責任意識を独立変数、対人不安意識を従属変数とした2要因の分散分析を行ったところ、交互作用が得られた。これは、対人的自己効力感の高低によって、責任意識が対人不安に与える影響が異なることを示している。対人的自己効力感が低いときには、責任意識の違いによる不安得点に大きな差はみられなかったが、対人的自己効力感が高いときには責任意識高群の不安得点が他の条件に比べて低かった。この結果から、責任を感じやすく、社会的にうまく適応していけるという自信がある人ほど、対人不安を感じにくいということが示された。しかし、責任を感じるが、その責任を果たすような対人行動をとれる自信がない人ほど不安を感じやすいという傾向は示されなかった。従って、仮説3については一部支持された。また、下位尺度ごとにみると、自分や他人が気になる悩みに関しては仮説を支持する傾向がみられた。つまり対人的自己効力感が低いとき、責任意識高群で最も不安得点が高かった。しかし、下位尺度ごとの分析では、集団に溶け込めない悩み、生きることに疲れている悩みといった下位尺度では予測通りの交互作用が得られたが、他の下位尺度においては交互作用は得られなかった。

以上の分析より、対人的自己効力感の程度によって責任意識の対人不安への影響が異なることが明らかとなった。しかし、責任意識の高さが対人不安を促進するという結果は示されなかった。その理由として、本研究で作成した責任意識尺度では、天井効果が生じ、高すぎるレベルの責任意識まで測定出来なかった可能性が考えられる。つまり、常識的に当然すべきである内容から質問項目が構成されており、本尺度では常識的なレベルの責任意識を持っているか否かという分類しか行えなかった可能性がある。また、本研究で作成した責任意識尺度は1因子となったが、責任意識の高さだけでなく、質的な差異によって対人不安との関連が違ってくる可能性もある。今後、責任意識のレベルや質的な差異を広範囲まで測定できる尺度の作成が必要である。

今後の課題

本調査の結果から、公的自己意識、対人的自己効力感の2要因に関しては、自己呈示モデルを支持する内容のものとなった。しかし、本研究で扱った要因は特性的なものであり、あくまでも対人不安意識という個人差との関連を検討したものであった。今後、状況要因も加えて理論的・実証的な研究を展開し、対人不安を低減させるための具体的な対処法を発展させて、臨床場面に活かせるものとしていくことが重要な課題である。

また、本研究では、責任意識の高さが対人不安を引き起こすという結果は得られなかった。しかし、責任意識のような個人の内的基準の高さは、自己呈示効率を低め、対人不安を引き起こす原因になっていると考えられる。今後、この基準の高さと対人不安の関係を明らかにしていくことも重

要な課題である。

引用文献

- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 箱井英寿・高木 修 (1987). 援助規範意識の性別, 年代, および, 世代間の比較 社会心理学研究, **3**, 39-47.
- 原田朋枝・島田 修 (2002). 社会的スキルの自己評価と対人不安との関連 川崎医療福祉学会誌, **12**, 75-81.
- Harris, D.B. (1957). A scale for measuring attitudes of social responsibility in children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **55**, 322-326.
- 林 洋一・小川捷之 (1981). 対人不安尺度構成の試み 横浜国立大学保健管理センター年報, **1**, 29-46.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.
- 亀田佐和子 (2001). 青年期における対人不安性に関する研究——公的自己意識, 一般性自己効力感との関連について 日本教育心理学総会発表論文集, 439.
- 金本めぐみ・横沢民男・金本益男 (2002). 「あがり」の原因帰属に関する研究 上智大学体育, **35**, 33-40.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店.
- 小平英志 (2001). 理想自己・義務自己への意識傾向の測定 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **48**, 283-289.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding social anxiety : Social, personality, and clinical perspectives*. London : Sage publications.
- (リアリー, M. R. 生和秀敏 (監訳) (1990). 対人不安 北路地書房)
- 丸山純一・清水 裕 (1990). 愛他的行動と人格諸特性との関連について 日本教育心理学会第 32 回大会発表論文集, 216.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1998). 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究, **46**, 21-30.
- 小川捷之 (1974). いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究 横浜国立大学保健管理センター年報, **14**, 1-33.
- Schlenker, M. F., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness) 作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- 菅原健介 (2002). 対人不安 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座 臨床心理学 3——異常心理学 東京大学出版会.
- 丹野義彦 (2001). エビデンス臨床心理学——認知行動理論の最前線 日本評論社.